

父からの贈りもの

長岡輝子



父^{いッパ}からの
贈りもの

長岡輝子

草思社

父^{ペッパ}からの贈りもの

一九八四年三月二十一日 第一刷発行
一九八五年五月十日 第七刷発行

著者◎長岡輝子

装画 堀内誠一

装丁者 平野甲賀

発行者 加瀬昌男

発行所 株式会社 草思社

東京都渋谷区神宮前四の二四の一〇(●150)

電話〇三(四七〇)六五六五 振替東京七一三三五二

印刷／三陽社 製本／大口製本

● 父^{ペイ}からの贈^ゼりもの ● もくじ ●

私の父と母	5
盛岡幼稚園のタッピング先生	14
ロンドンの父からのプレゼント	26
春の中津川の杉土手	34
ご褒美は成績の悪い子に	41
妙子姉さんのロマンス	53
You must go to bed.	60
淡い初恋	68
東洋英和の卒業演説	78
文化学院に入る	82
房州・鱈ヶ浦の青春	87
大人になった「ラザロ」との再会	92

原書を一日に四時間読むように 97

築地小劇場の試験を受ける 101

ヨーロッパで芝居を見ておいで 108

四十二日間の船旅 114

パリの寄宿生活 128

パリの日本人 133

ベルリンへ行く 140

ひとりパリに立つ 145

新しい日本の女史たち 153

夏休みの大旅行 155

バルト海の小さな島で 160

国際女学生会館での盆踊り 164

多くのアジアの友人たち

168

南仏マントンにて

178

百合子姉さんの死

189

アトリエ座の研究生

194

父よ！ 父よ！

197

やさしい男たち

201

柱を失った家

206

あとがき

211

私の父と母

私の記憶は三歳から始まる。当時、私の一家は麻布簞笥町の高台に住んでいた。

目の下に街をへだてて、向う側の崖の上に西洋人が住んでいた。開け放された窓という窓に、白い寝具が陽をいっぱい浴びて干してあり、頭のはげた西洋人が行ったり来たりしていた。女の西洋人はいなくて、和服を着た日本の女の人がいた。もちろん目鼻立ちがわかるほど近くはないので、活動写真か操り人形を遠くから見ていたような気がする。ペランダで白い寝巻を着たハゲさんが鏡を反射させてヒゲを剃ったり、夏の夜おそくまで電気をつけてビールを飲んでいたりした。

当時、九歳だった妙子姉さんも、今では七人の曾孫がいるが、先日会ったときにその話が出た。

「あのハゲさんはユンケルさんというドイツ人で、音楽学校の先生をしていらしたのよ。ほら、毎日あきずにかけてた曲、おぼえてる? 『トラバートーレ』の中にでてくる『アンヴィル・コーラス』」

……」

私は頭の中で「アンヴィル・コーラス」を繰り返し返してみた。と、今から七十年も昔、毎日のように風にのって流れてきた、あの出だしの爽快なメロディが、消えていた幼い日の私をだんだんはつきりと映し出してくれるのだった。

青草と赤土のんだらな崖の下には家がたくさん並んでいて、その露路を、金モールのついた黒

い軍服を着た薬屋さんが、手風琴を鳴らしながら、

「クースリヤさんが来いましたヨ、なアにか買って、くうださいなア」

と節おもしろく売りにきたけれども、あのころの私は大変な泣き虫で、家を一步外に出ると怖いものだらけだった。

おわいやさんの「オワアイ、オワイ」という掛け声が聞えると、「テルコ、テルコ」と自分をつかまえにくるのだと思っていたし、谷町へ下りる途中のお寺の山門に、印半纏しるはだんを着た男が寝ていれば、人さらにちがいないと思いきんでいた。そして一番怖かったのが、観音像を祀った箱を背中につけた山伏のような人だった。背中の箱には、古ぼけた人形や死んだ人のと思われる髪の毛、色褪いせた子供の写真などがいっぱいぶらさがっていて、なんとも気味が悪かった。あのころの子供の遊びに、「千手観音拜んでおくれ」といいながら、ひとりがひとりを背中合せにおぶって歩く遊びがあったけれど、あれを真似たものだったのだろうか。

ある朝のこと、家のまわりを掃いていた女中が大声で家へ駆け込んで来て、

「ものすごいウンコが塀のところにしてあります」

という。十一歳になる兄や妙子姉さんや、私のすぐ上の七つになる百合子姉ちゃんたちの話では、それは泥棒のウンコだというのである。泥棒がウンコをするのは捕まらないおまじないなのだそうだ。みんなの顔は深刻だった。もうあのそばのペンペン草もハコベも摘めなくなってしまった。尻っぱしより手拭いで覆面をした真黒な泥棒が家のまわりをウロウロしてゐるんだ。そう思うと私はもう怖く

て、お茶の間にいるお祖母^{おば}さんの背中の下にうずくまってしまふのだった。そんなふうだったから、保母さんの学校へ通っていたタマちゃんと一緒にお使いに行くときも、ちよつとでもタマちゃんの手をはなさなかつた。タマちゃんは私のお守り役で、私の作り話の「神楽坂^{かぐらざか}のみさいさん」を本気で聞いてくれた。神楽坂に知合いがいたわけでも行つたわけでもなかつたのに、私の作り話の主人公はいつも「神楽坂のみさいさん」だった。

子供たちは日曜日になると、靈南坂^{れいなんざか}教会へ行かされた。牧師さんの小崎弘道先生は同志社大学時代の父の先生だったから、なにかと私たち兄弟に声をかけてくださった。そのころ父は大倉商業（現東京経済大学）の英語の教師だった。

父^{ちち}は明治十一年九月十一日、福岡県柳川の士族、森節の二男として生れた。祖父は立花藩の江戸詰お留守居役をしていたので、祖母^{おば}貞は東京の人だった。父が十歳のとき祖父が亡くなり、十六歳で京都の同志社に入学したが、卒業間近のころ、アメリカ人の宣教師と日本人の校長とのあいだでキリスト教の伝道について意見の対立が生れ、ついに校長側が敗れて多数の日本人教師が校長とともに同志社を去るという事件があつた。そのとき父は生徒の立場から敢然と校長を支持して同志社をやめてしまった。その校長が靈南坂教会の小崎弘道先生である。

父は柳川の家に戻ると、祖母が息子の学資のために百人一首を内職に書いていたことを知つた。

「パパさんはね、私がいくら羽織^{はおり}や袴^{はかま}を作つて送つても、みんな人に上げてしまふんでね」

と、お郷里^{おぐら}のおばあさまと私たちと呼んでいた柳川の祖母が、後年、当時のことをしのんで笑い

ながら話したことがある。

外交官を志して同志社に入っただが、そのときはまず働くことが先だった。二十歳の父は北海道に渡り、根室実習学校という私立の学校の英語の教師として赴任した。

当時、クラーク先生によって有名だった札幌農学校は若人の憧れだったが、札幌よりもむしろ根室や函館は政治、産業、文化の面で進歩的な街だった。たしかに北海道というところは開拓時代のアメリカのような、処女地としての夢をいっぱい孕んでいたのだ。

そのころの父の姿を当時の教え子はこう書いている。

「ある日、子供のような小柄な青年が最新式の濃い茶のソフトを前のめりにかぶり、揚々と校門をくぐって来た。この生徒とあまり年齢の違わない先生は熱心な態度で徹底した講義をしたので、たちまち崇拜の的となった。英語のほかいろいろな学科を受け持ち、なかでも歴史が得意で、原書を使ったローマ史のおもしろさは少年の胸を躍らせた。勉学のほかに彼は率先して運動を奨励し、馬を借りては遠乗りに出かけたり、野球では同志社仕込みで、いろいろなモーションで投げたり、すべり込みを見せたりして、初めて見る田舎の少年たちを呆氣にとらせた。ボートの猛練習をさせるのも森先生で、生徒の集会所になっていた先生の下宿には、同志社時代の琵琶湖の競漕のときの優勝メダルがあった……」

父は日曜日になると、街の教会でおよそ宗教臭くない話もした。新島襄先生の閱歴や信仰、その公正さなどについての話は青年を刺激し、この街の若者のあいだに東京遊学の熱を高め、後にたくさん

の知名人を出した。

やがて父は根室の街に九歳から住んでいた母とめぐり逢う。

母栄は、盛岡の旧家向半の一族で、長岡嘉七の一人娘として明治十年四月九日、岩手県盛岡で生れた。盛岡の小学校で四年学んだ後、北海道に渡り、根室花咲小学校高等科四年を卒業した。父の赴任した根室実習学校は現在残されていないが、創立した山県勇三郎は玄洋社で政治活動をした後、北海道開拓事業に意欲的な活動を開始し、船舶事業のほかに私学振興に力を注いだ人物だった。その山県勇三郎の妹のおこまさんは母の遊び友だちで、山県牧場で馬に乗ったり、コチロンやカドリール（四人組で方形をつくって踊るフランスのダンス、コチロンもカドリールに似た踊り）を踊ったり、宣教師のカーパーンターさんのところで編物を教わったりして、楽しい少女時代を過したらしい。

カーパーンターさんは母をアメリカへ連れ帰って勉強させたいと主張したけれど、当時のこととて祖母げんは一人娘をはなせるわけはなかった。花咲小学校の校長の水野貞子先生は十五歳の母を代用教員として学校を手伝わせたが、母はもっと勉強がしたくなって、はるばる上京。いきなり女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）を受けるのは無理だと、当時、麹町にあった明治女学校に入学した。祖母は祖父を残して娘につきそっていった。明治女学校は東京でも最も進歩的な色彩をおびた学校で、校長はヴァイオリニスト・巖本真理さんの祖父にあたる巖本善治氏。その夫人は「小公子」の名訳で知られる若松賤子女史だった。戸川秋骨、青柳有美、大和田建樹、島崎藤村などが英語や国語を教えていたが、母が入学したころは藤村が最初の恋人・佐藤すけ子との失恋で放浪生活をした後、また明

治女学校に落ち着いた時期にあたる。

自由学園を創設した羽仁もと子、救世軍の山室軍平氏夫人になった佐藤機恵子、新宿中村屋の相馬黒光、藤村の恋人だった佐藤すけ子、藤村夫人になった秦冬子などはみんな明治女学校の生徒だったけれども、休暇で北海道へ帰るとき、母といつも一緒なのは函館の網問屋の娘・秦冬子さんだった。翌年、母は明治女学校から女子高等師範学校に転入したが、夏休みに水野先生の紹介で初めて森菰なる青年に逢った。

父はデニソンやワーズワースの詩が好きで、よく大きな声を出して朗々と吟じていたが、そのころ、学生たちに文芸誌を作らせたり、新体詩の勉強会みたいなものをしていたので、藤村の教え子である母を水野先生が父にひきあわせたのである。

父はたちまち母が気に入ったらしい。休暇が終りに近づくころ、二人はフィアンセの間柄となり、母が一人娘なので父は長岡家に入ることにきまつた。母が上京すると、父は下宿の机の上に母の写真を飾り、学生たちが来ると、

「どうだ、どう思う？」

と聞くので、当時の教え子たちは、どう返事をしたらよいかわからず大変困ったそうだ。

ところが、その翌年の夏、母は父の兄が急逝したという知らせを受けた。森家が士族であることを思い、森家を継がなければならぬ父の立場を考えて、母はフィアンセの間柄を解消しようと申し出た。すると父はひどく驚いて次のような手紙を母に送ったのである。

「余の最も敬慕する長岡栄子嬢足下

それ財宝、地位は祖先の賜うところにして、妻は神の賜うところなり。余は余の神に仕うるがごとく、神の賜いし足下に仕うべきを誓う。余は余の神のためにすべてをささげまつるがごとく、神の賜いし足下のために余の名譽、地位、そのほか余のもてるすべてをささぐべきを誓う。

余は余の神を捨てて金銀、財宝、そのほか浮き世の何物、何人をも慕い求めざるがごとく、神の賜物なる足下を忘れて浮き世の快樂、富貴、そのほかいかなる物もしくは人を慕い求めざるべきを誓う。余はただひたすらに余の神の喜び給うことをこれ務むるがごとく、余は天下のいかなることよりも足下の喜び給うところを、心を尽くし、精神を尽くし、心ばせを尽くして務むべきを誓う。かくて余は天国を我らの家庭の内に来らすべきをわが神に誓うものなり。

余の最も愛する足下よ、願わくはその身体幸くあれ、その心清くあれ、神の前に正しくあれ、その両親に孝順なれ、世の人に親切なれ、その職務に勉勵なれ、かくて神の賜物としてふさわしくあれ、これ小生が涙を流してわが神に願うところの祈禱なり。神よ願わくはわが最愛の妻を恵み給え、我らを守り、我らを導き給え、アーメン。

いま余が神の賜いし足下に対するの喜びと余の決心と足下に対する余の希望の一半を書して、最愛なる足下に呈す。願わくは汝に忠実なる汝の夫を愛せよ。

明治三十二年八月二十日

そして、翌明治三十三年、母の女高師卒業と同時に二人は結婚した。父二十二歳、母二十三歳の初夏のことである。

この手紙は母が九十六歳で亡くなる前年、
「これ、もう捨てちゃおうかしら」

と帯のあいだから出して見せてくれたものである。紙は茶色に褪せていたが、墨の色は冴々と残っていた。父は五十二歳で急逝するまで、この誓いを忠実に守り、母もまた父の死後ひとりで過した四十数年を父の望んだとおりに生きた。

二人は根室から盛岡に帰り、結婚式を挙げると、父は私立の商業学校から県立盛岡中学（現県立盛岡第一高等学校）に、母は県立盛岡高等女学校（現県立盛岡第二高等学校）に赴任した。今でこそ夫婦共稼ぎの家庭は少なくないが、明治の終りごろではめずらしかった。私たちは生れながらそういう家庭に育ったが、別に寂しいとも思わなかった。家には賑やかで美しいお祖母さんがいつも家族の中心にいて、祖父や、爺や、女中のほかに、お祖母さんの髪を結にくるおたきさん、その夫のじっちゃん、言葉のおしまいに必ず「左様でござりまする」というので「お左様さん」と呼ばれていた按摩さん、そのほかに父や母の生徒さんが入れかわり遊びにきていたので、いつも笑い声の絶えない家だった。

長男の光一こういちが生れたのが明治三十四年、翌年、長女妙子たえこが生れた。兄の記憶によると、この若い夫婦はそれぞれの背中に子供をおぶって、よく鬼ごっこをして遊んだそうである。夫婦が連れだって歩いてもとやかくいわれる時世に、さぞや型破りな夫婦だと思われたにちがいない。明治三十八年に次女の百合子ゆかりこが生れた。

当時の盛岡には幼稚園も保育園もなかった。母は長男のために幼稚園の必要を痛感していたので、矯風会きょうふうかい（禁酒を主張して一八七三年、アメリカに起ったキリスト教婦人矯風会の支部）の婦人たちとはかつて、まず勤務先の女学校の体操場を午後から借り受け、家にあった積木やおもちゃを運び、保育園に近いものをひらいた。

今の盛岡幼稚園の佐藤徳先生の母堂たつさんや萱場弁護士の夫人久恵さんたちが多忙な母を助けて熱心に子供たちの世話をしたので、入園を希望する人たちがふえ、そのうちに三十人を超してしまったために、女学校の体操場を立ち退かなければならなくなった。母はせっかくここまで育った保育園を解散するにしのびず、市や県庁に引き取り方を交渉したが、予算がないという理由で断わられてしまった。

途方に暮れていたちようどそのとき、浸礼教会バプテスト（一六〇八年、J・スミスがアムステルダムで組織したキリスト教新教の一派）のミッションから宣教師のタッピング夫妻が盛岡に来られ、保育園の話聞かれると、すぐに子供たちを引き受けてくださることになった。それが内丸幼稚園、今の盛岡幼稚園である。

ミスター・タッピングは山高帽をかぶった洒落たアメリカの紳士で、ミセス・タッピングは背が高く、蜂のように胴がくびれた裾の長い洋服に、造花とベールのついたボンネットをかぶった女優さんのような先生だった。

明治四十一年の正月五日に、三女の私が生れた。そのころ、父の教えていた岩手県立盛岡中学の校長が進歩的な教育方針をもっていたために、九州鹿児島さつだいの川内の中学に左遷されるという事件があった。すると父は校長を支持して自分も九州へ転任してしまった。母はその間、父の好きな焼りんごやカレーを作り、それを罐詰にして父に送ったという。罐詰にすることを思いついたのは、画家の深沢紅子さんのご夫君・深沢省三さんのご実家が罐詰を作っていたので、そこへお願いしたそうである。翌年、父は九州の中学から大倉商業に赴任することになったので、一家は東京へ移った。それから間もなくして、大洪水で中津川（北上川の一支流）が氾濫し、それまで住んでいた馬場小路の家も水をかぶったという報せが来た。私の三歳の記憶はそれから一年後のことになる。

明治四十四年一月五日に四女節子（みいちゃん）が生れた。翌年、父は大倉商業から英国に留学を命じられて留学生になったので、私たち一家はまた盛岡へ帰ることになった。

盛岡幼稚園のタッピング先生

家は大沢河原小路の中津川に沿った陽あたりのいい平屋だった。庭の先は畑になっていて、畑から